

イスラエルのキブツという集団農場で丸二年間働き、1970年に帰国したわたしは、日本での居場所さがしに、あちこちを転々としていた。

しばらくして、たまたま実家の近く、住宅街の真ん中にカウンターだけのビストロがあり、おそろおそろはいってみると、なんとメニューに、つぼ焼きシチューがあった。

無愛想なマスターのつくるつぼ焼きは、絶品だった。彼は別に本業があり、店はほぼ生きがいの副業だったため、たった6席の店はいわゆる大勢の客が出入りする店ではない。うちの喫茶店と同じように、次のお客さんが来たら帰ろうと思って話し込んでいると、次のお客さんは永遠に来ない、まさに住宅街の隠れキッチンだった。

マスターは、趣味でチェロを弾いているらしかった。ぼそぼそした小声で、「楽器はいいね。いっしょに泣いてくれるから」と、彼自身に言いかけさせるように語ったのが、あれからだいぶたった今も、わたしを支えてくれる。

どうしようもない困難をかかえたとき、窮地に追い込まれたとき、自分のいんちきピアノと数種のコードしかできないギター、あやしい音階のオカリナは、かけがえのない三種の楽器になった。知人との合奏なら、もっと早く立ち直れるだろう。CDから流れるメロディよりも、こころに染み入る好きな歌詞よりも、自分の手で奏でる楽器は、そのマスターの言うとおり、ほんとうに、いっしょに泣いて、いっしょに笑ってくれるのだった。

東京渋谷で点火した、わたしのつぼ焼きシチューの行灯は、消えそうになりながらも、41年後の今、うちの店の定番として細々と灯っている。

でも、夜になると、今後の店の行く末を思い、途方にくれる。そんなとき、どういうわけか、あのうす暗い路地裏での縄跳びが、ふと思いうかぶ。

距離的にも時代的にも、身体的にも心情的にも、今の自分から一番遠くにあるものなのに、縄跳びとは笑ってしまう。

大波小波を、いったいどうやって跳べというのか！？